

アドバンスト施設による 次世代機器導入事例



社会福祉法人府中西和会・特別養護老人ホーム鳳仙寮

本日本話しする内容

- 施設概要
- 導入した次世代介護機器
- 導入の流れ（9つのステップ）
- 取組内容
- 導入による成果
- 導入に関わった職員の声
- 取組中に発生した課題と乗り越えるための工夫
- 取組を通じて気づいたこと・重要と感じたこと
- 次世代介護機器導入を考えている事業所の方へ伝えたいこと

施設概要

運営法人	社会福祉法人府中西和会
施設名	特別養護老人ホーム鳳仙寮
所在地	東京都北多摩南部エリアの府中市に所在
定員	70名(うちショートステイ5名)
平均介護度	3.8
職員数	95名 うち介護職員39名(2023年5月現在)
特徴	法人名の根拠となる「地域の和」を理念の軸とし、地域社会との交流を重視し、地域の高齢者福祉の拠点を目指している。



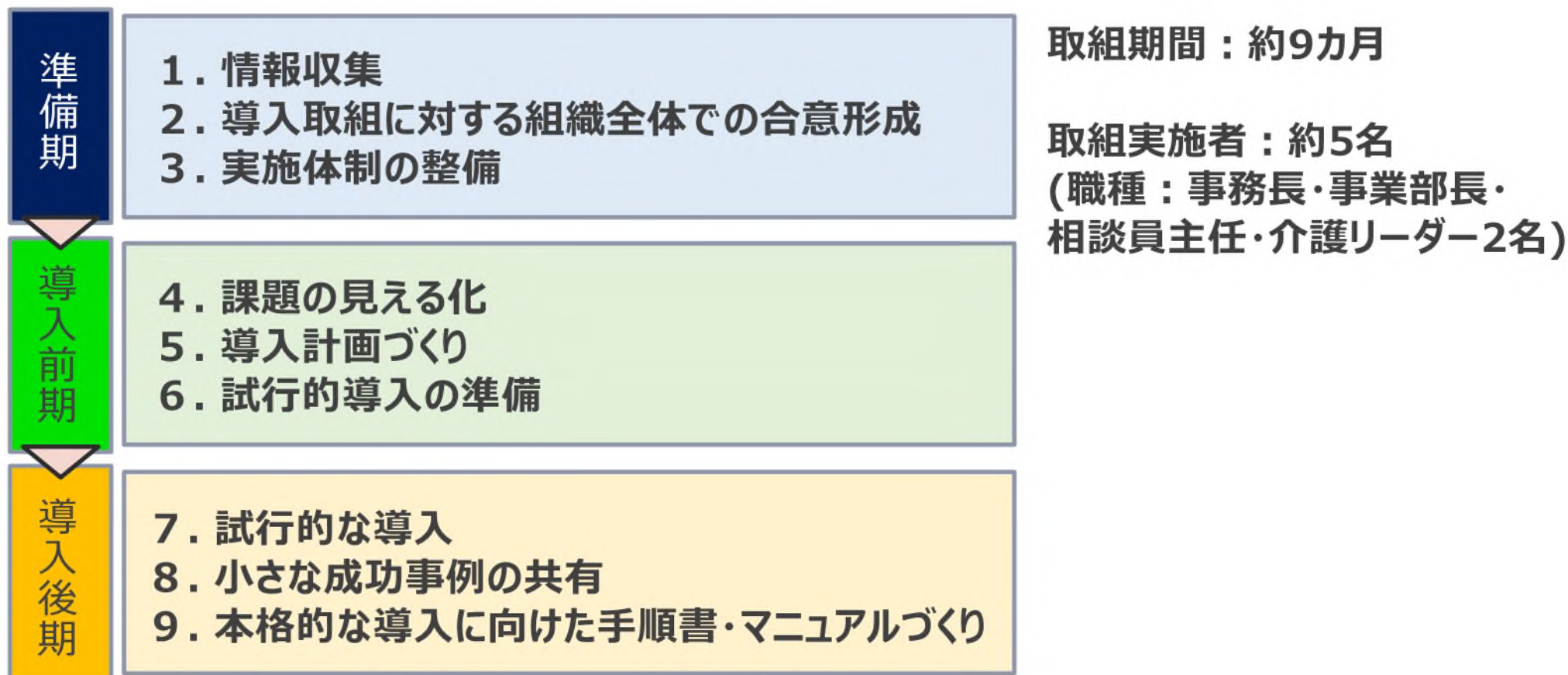
導入した次世代介護機器

メーカー名	パラマントベッド
機器名	Espacia KA-N1521J センサー機能付ベッド
台数	6台



機器導入の取組内容 導入の流れ

次世代介護機器導入の9つのステップ



出典：平成30年度 介護ロボットを活用した介護技術開発支援モデル事業 報告書から一部修正

準備期の取組内容

取組期間：7月1日～12月31日

準備期

1. 情報収集
2. 導入取組に対する組織全体での合意形成
3. 実施体制の整備

1. 情報収集

- ホームページや福祉用具業者よりパンフレットを取り寄せ、センサー付ベッドのイメージを作る。
- やり取りをした業者の中から2社に実際のベッドを持参して頂き、プレゼンテーションを受ける。
 - ・ベッドの現在使用していたベッドに操作が近い。
 - ・離床、見守りのセンサー使用内容が現在使用ににている。
など現在の使用に近くなじみやすいものを選択する。

2. 導入の取組に対する組織全体での合意形成

- プレゼンテーションにて、実践的な状況で導入イメージ作りを行えた。職員より等関心が深まった。
- 管理職より導入時期や導入台数等具体的な話をミーティングで共有した。

3. 実施体制の整備

	役職	チーム内での役割
1	事務長	申請関係や業者交渉等
2	施設事業部長	総括責任者
3	相談員主任	チームリーダー
4	3F介護リーダー	担当フロア現場指導
5	2F介護リーダー	担当フロア現場指導



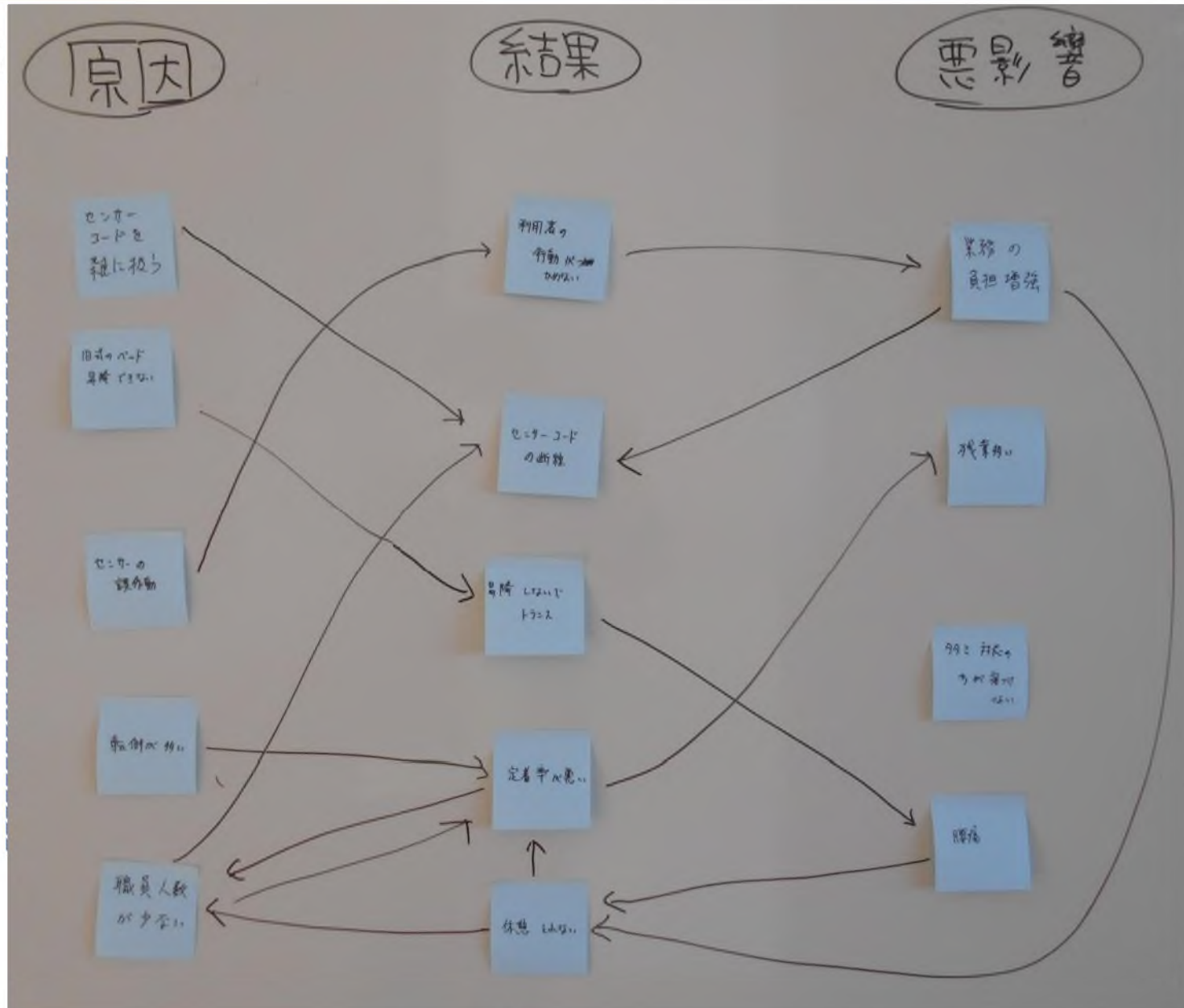
導入前期の取組内容

取組期間：8月1日～8月31日

導入前期

4. 課題の見える化
5. 導入計画づくり
6. 試行的導入の準備

4. 課題の見える化



導入前期の取組内容

取組期間：9月1日～9月30日

導入
前期

- 4. 課題の見える化
- 5. 導入計画づくり
- 6. 試行的導入の準備

5. 導入計画づくり

■ 課題解決に向けた道筋

- センサー付きベッドを導入する事で見守りの状況を強化する。それにより職員の負担を軽減し事故を減らしていく。

■ 導入する次世代介護機器

- Espacia(エスパシア) KA-N1521J/センサー機能付ベッド (パラマウントベッド)

■ 成果を計る指標

- 導入前と導入後の同一利用者の事故発生およびヒヤリハット報告件数の確認
- 導入前の職員の精神的負担の状況と導入後の精神的な負担の差を検証する

導入前期の取組内容

取組期間：7月1日～1月31日

導入
前期

4. 課題の見える化
5. 導入計画づくり
6. 試行的導入の準備

6. 試行的導入の準備

- 導入機器（センサー付きベッド）のフロアへの周知
- 業者によるベッド使用のデモンストレーション（フロアの介護リーダー参加）
- 業者のデモンストレーション参加者が使用方法を可視化する。
- ミーティングにて導入機器の使用方法を伝達する。



プレゼンテーションに使用したパンフレット



業者がベッドを持ち込み説明を受ける

導入後期の取組内容

取組期間：1月1日～3月31日

導入後期

- 7. 試行的な導入
- 8. 小さな成功事例の共有
- 9. 本格的な導入に向けた手順書・マニュアルづくり

7. 試行的導入

■「効果的に活用するコツ」

- 旧型のセンサーを使用していた利用者に対して、次世代機ベッドを導入し、本人の状況にあったセンサーの設定を行う。
 - ・センサーマット ⇒ 端座位モード
 - ・タッチコール ⇒ 体動モード に設定する。 利用者に合わせ変更とする。
- 行動把握のための試験的導入には、見守り5分程度から使用する。
- 体動⇒端座位⇒離床⇒見守りの順番に施行を行い本人の状況にあった設定を決定していく。

■「効果的に活用できなかった原因」

- 導入当初は離床キャッチの設定を、利用者の状況に合わせた設定としていなかった為、誤作動が頻発する事が多かった。

導入後期の取組内容

取組期間：2月1日～3月31日

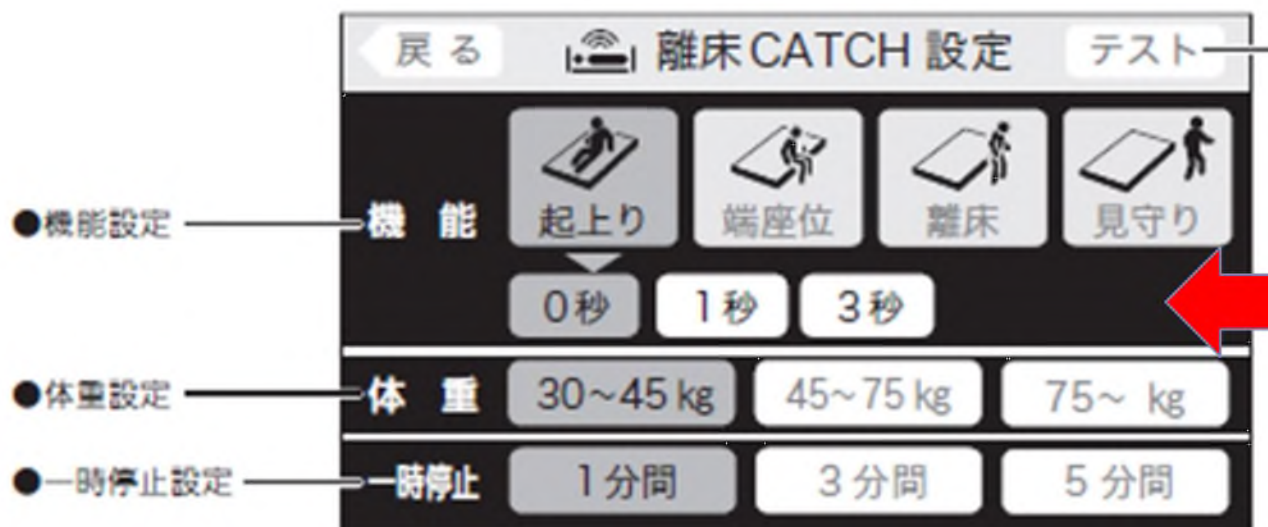
導入後期

- 7. 試行的な導入
- 8. 小さな成功事例の共有
- 9. 本格的な導入に向けた手順書・マニュアルづくり

8. 小さな成功事例の共有

■ 共有した成功事例

- センサー付きベッドは離床動作開始でセンサーが作動する機能が付いている。導入した事で、離床する前に駆け付ける事ができた。(申し送りやケース記録等利用)でチーム全体にも導入の効果があった事を共有する。



- 離床キャッチの設定を離床・端座位等と秒数を0秒～3秒等設定を様々試し、本人にあった設定を決めた。

モニターの離床キャッチ画面

導入後期の取組内容

取組期間：2月1日～2月28日

導入後期

- 7. 試行的な導入
- 8. 小さな成功事例の共有
- 9. 本格的な導入に向けた手順書・マニュアルづくり

9. 本格的な導入に向けた手順書・マニュアルづくり

■作成したマニュアル

7 ベッドナビの使いかた

通知機能の設定
46ページの離床CATCHホーム画面の「設定」をタッチすると、離床CATCH設定画面を表示します。離床CATCH設定画面では、離床CATCHIIの通知機能設定（機能設定・体重設定）を設定できます。現在設定されている状態が青色で表示されます。



- 機能設定
離床CATCHIIの機能設定を設定できます。
※離床情報はベッドナビでは設定できません。
※離床CATCHIIの機能については61ページを参照してください。
①「起上り」を設定した場合
・起きあがり何秒持続された場合に通知するかを設定してください。(0, 1, 3秒)
※初期設定は1秒に設定されています。
②「見守り」を設定した場合
・離床が何分持続された場合に通知するかを設定してください。(1, 3, 5, 10, 30分)
※初期設定は3分に設定されています。
- 体重設定
使用者の体重にあわせて体重を設定してください。
※初期設定は45～75kgに設定されています。
- 一時停止設定
一時停止から復帰するまでの時間を設定できます。(1, 3, 5分)
※初期設定は3分に設定されています。



- 使用者の体重にあわせて体重設定をしてください。正しく設定しないと、検知できない可能性があります。
- 離床CATCHIIは、体重30kg以上の方を想定しています。30kg未満の方は検知できない可能性があります。

ベッドナビ使い方



操作選択ボタン

- ベッドの操作を行うときに、①～⑤の操作選択ボタンのうち1つをタッチして、どの操作を行うかを選びます。
- ①運動ボタン……カインドPLUSで背あげ・背下げを行います。
 - ②傾ボタン……背ボトム・脚ボトムの角度調節ができます。
 - ③足ボタン……脚ボトムの角度調節ができます。
 - ④高さボタン……ベッドの高さ調節ができます。
 - ⑤メモリーボタン……あらかじめ設定したメモリーポジションに向かって、背ボトム・脚ボトムの調節ができます。

動作ボタン

- 操作選択ボタンで動作を選択し、⑥⑦の動作ボタンのどちらか1つを押すとボタンを押している間だけベッドが動作します。
- ⑥あがるボタン
背・脚をあげる・ベッドの高さをあげます。カインドPLUSであげます。メモリーポジション1へ動作します。
 - ⑦さがるボタン
背・脚をさげる・ベッドの高さをさげます。カインドPLUSでさげます。メモリーポジション2へ動作します。
- 動作ボタンを押すとベッドが動き、離すとその位置で止まります。
●操作ボタン・タッチパネルのうら、2ヶ所以上を同時に押した場合は止まります。
●同時に2ヶ所以上を押して止めた場合、再度操作をするときは一度すべてのボタンなどから手を離してください。

操作選択ボタンをタッチすると、タッチしたボタンが青色となり、どのボタンが選択されたかがわかります。(メモリーボタンを除く)

- センサー付ベッドの核となるベッドナビの使用法マニュアル
- 裏表のシンプルな1枚とし表をベッドの高さやリクライニング方法、裏はセンサーの設定方法を掲載した。

導入による成果

- 離床動作の早い利用者に対し使用した事で、職員が動作開始直後に介入できる事となり、転倒事故が減少した。
- 事故対策委員会の調査でベッドから離床後の転倒率が高かった利用者について、1ヶ月の転倒事故が導入前3件⇒導入後0件(ヒヤリハット1件)に減少した。
- ベッドナビ(液晶パネル)でセンサーとリモコン(高さやリクライニング調整)双方の操作ができる事が周知された事で、今まで使用していなかった高さ調整やリクライニング機能を積極的に活用する職員が増え、腰痛予防に繋がった。

導入に関わった職員の声

- 導入に対して他人事と思っていた職員も多数居たが、プロジェクトメンバーからの情報提供や、メリットを伝える事で、導入意欲が高まった。
- 転倒リスクの高い利用者の離床後の転倒に対して、解決策を模索していたフロアー職員に対して、センサー付ベッドの機能について説明すると、ベッドナビ機能の「動作設定」や「時間設定」に興味を持ち、自らの夜勤中にデータを取る等、前向きな職員も出てきた。
- IT機器が苦手な職員は管理職やIT機器が得意な職員がやってくれるであろうという気持ちが強く、機器の操作理解に積極的でない
⇒現在は導入・評価のチームに参加することで、興味関心が増えてきている。

取組中に発生した課題と乗り越えるための工夫

発生した課題

- 利用者の状態に合わせた設定にできていない。
- 誤作動が多い

工夫

- センサーの設定方法をチームに周知した。
- 使用する利用者を選定するプロジェクトチームを組んだ。

現在の状況

- 転倒リスクの高い利用者の動作に合わせた設定を分析し設定した事で、転倒リスクが減り、職員の業務負担軽減に繋がった。



利用者により設定を細かく調整

取組を通じて気づいたこと・重要と感じたこと

- IT化に対して近隣の施設より遅れがあったが、今回のセンサー付ベッドと同時に導入した記録ソフトを活用し始めた事で、IT化が段階的に1歩進んだ意識が強くなった。
- 段階的に考えて行く事や「小さな成功事例」を作り上げる事で、チームが活気付くという事を学ぶことができた。
- 金銭面や現場レベル等多角的な捉え、チーム作りをする必要性を感じた。管理者(施設長)を巻き込み、チーム構成メンバーには事務・現場責任者・部署所属長等影響力のある職員で構成されると導入までの道筋がより立てやすくなる。

次世代介護機器導入を考えている事業所の方へ伝えたいこと

- 次世代介護機器といってもたくさんあり、何が良いのか迷うところです。施設の形態や規模にもよりますが、スタンダードなところで記録システムをIT化する事で、派生して様々なところを次にIT化と話が出やすいと考えます。
- 当施設ではセンサー付ベッドと並行して記録をソフトを導入しIT化、同時期に眠りスキャンを導入した。
- 記録システムは基本的に毎日触る機器ですので、IT機器が苦手な職員もソフトを使用していくうちにITに対しての理解が深まる。

次世代介護機器導入のその後・・・。

- 介護機器操作に苦手意識を持っていた職員も日々の業務で繰り返し使用することで、困難なく操作できるようになった。
- 既存のセンサーマット・タッチコールの使用が減り、故障が無くなった。
- ベッド導入と共にマットレスも低反発の物を購入したため、床ずれの悪化軽減につながっている。

<課題>

- 導入ベッドがまだ少ない為、センサー付きベッドを使用したい利用者に瞬時に提供できない場面がある。
- 今回導入したベッドは、一つのフロアにしか導入していない為、他フロアの職員に操作方法の周知が出来ていない。
- 全居室に導入するものではなく、利用者に合わせて導入する必要がある。